

【日々神の御言葉によって生きる】

聖書:ネヘミヤ記8章1-10節/暗唱:テモテへの手紙第二3章15~17節 説教者:鄭南哲牧師
(Rev.Jung nam-chul)



愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!一週間も、みんな変わりなくお元気でしたか。

今日は39冊の旧約聖書の中‘歴史書’と呼ばれているネヘミヤ記についてお話させていただきます。

旧約の歴史的な御言葉は、神様に選ばれて、神様を信じていたイスラエルの民族の歴史の中で行われた神様の救いの働きに関する記録ですので、当時の歴史的背景を知らなければ、すぐに理解できない箇所がかなりあると思います。

17冊の預言書も北イスラエルと南ユダに宣べ伝えられた神様の御言葉ですので、歴史的背景を知る必要があります。

<1. ネヘミヤ記本文の背景>

いま集っている方々の中には長らく、教会に出席している方もいれば、最近教会に来ていますし、ネヘミヤ記をすでに読んだことがある方もいれば、今日初めて開いた方々もいらっしゃるので、まず今日の本文ネヘミヤ記の背景を説明させていただきます。

最後まで罪を悔い改めず、むしろ神の御言葉を伝え続けた預言者たちを殺し、偶像崇拜に満ちていた北イスラエル王国は、神の裁きにより、紀元前722年にアッシリア帝国によって、サマリアが陥落され、捕虜となってしまいました。南王国だったユダ王国もそれを見て、真剣に悔い改め、神様に立ち返らず、偶像崇拜を諦めず続いた結果、同じ形のように、**BC586年に、ゼデキヤ王の時、バビロン帝国によって滅ぼされてしまい、多くの南ユダの民はバビロンに捕虜として連れられて行き、70年間捕虜の時を過ごしました。**しかし、神の御約束通り、彼らは70年経って、バビロンから、新しい帝国であるペルシアに変わり、本土(ほんど)ユダのエルサレムに戻れる帰還することが許されることになりました。神様の御約束通りになされたことで分かります。つまり、**イスラエルの民が70年間の捕虜生活の後、本土に戻ると言うことは予め、エレミヤ預言者を通して仰せられました。**それだけではなく、イスラエル民の帰還は回復して下さる神様をすでに表しました。イスラエルの民が偶像を拝み、神様に不従順した時、彼らを懲らしめましたが、70年の時が経つと彼らを回復させて下さることなのです。

我々も時々、神様はどうしても神の御言葉に従い続けられない時、我らの為に懲らしめて下さる時もあるでしょう。

しかし、神様は我々を破壊させたり、永遠に滅ぼそうとするためではなく、我々の傷を癒し、傷ついた魂を回復させて下さると言うことを教えて下さっています。

イスラエルが二つに分かれて、バビロンの捕虜に行ったユダヤ人たちは70年が過ぎた後、神様は、当時新生王国であるペルシアの王クロスの勅令(ちよくれい)を出させて、具体的に本国イスラエルのユダに戻るようになされた。それで紀元前536年に、一回目のヨシュアとゼルバベルの指導によって約5万人を連れて、本国イスラエルに戻る帰還となり、彼らは崩れた神の神殿を建て直しました。そして、それから約80年が過ぎた紀元前458年には、1758人が、祭司であり、聖書学者であったエズラによって第2回目のイスラエルへの帰還が行われました。そして、その13年後、紀元前445年、焼き尽くされたエルサレムの城壁を再建するため、ネヘミヤの導きによって3回目のイスラエルへの帰還が行われ、その3回目の戻った時の内容が今日のネヘミヤ記の内容であることが分かります。

<2. ネヘミヤはどんな人でしょうか。>

この3度目期間の時の指導者がネヘミヤでした!ネヘミヤ記は神様がネヘミヤを通して記録させた聖書です。

1人称(にんしょう)自伝的な記録(じでんてききろく)となっています。

ネヘミヤという言葉は“**神の慰め**”という意味です。聖書を見ると、名前に‘ヤ’という言葉がよくついています。この‘ヤ’という意味は**神様**を意味します。たとえば、イザヤは‘神は救い主である’、ウリヤは“神は私の光”という意味です。このネヘミヤ記はネヘミヤによって壊されていたエルサレムの城壁の再建(1-7章)とイスラエルの民の道徳的、靈的改革運動(8-13章)が記録された聖書で、約25年間の間の内容です。

ネヘミヤはどんな人だったのでしょうか。彼は捕虜として連れられて行ったイスラエル人だったのにもかかわらず、ペルシアのアルタクセルクセス王(465-423BC)の献酌管(けんしゃくかん)になった人でした(ネヘミヤ記1:11)。

献酌管というのは今の時代だと王の飲食を担当する秘書として当時宮殿の中暗殺の多い時代にもっとも大切な身分でし

た。ネヘミヤは王がいるスサの城(1:1)で勤務しましたが、このスサ(ン)の城と言うのは、ペルシア王が冬に過ごしていた官邸でした。ネヘミヤは王と直接会うこともでき、王にまで影響を与えることのできるほどの権力がありました。捕虜出身のネヘミヤが当時これほどの地位に上がったのは、よほどの信頼を得ていたことが分ります。

ところが、先にエルサレムに帰った彼の弟であったハナニからエルサレムに残っている人々が今困難の中におり、エルサレムの城壁は破壊されたままで、城の門も焼き尽くされたと言う残念な知らせを聞きました(ネヘミヤ記1:1-3)。悲しい知らせを聞いたネヘミヤは何日間、まず、神様の前で断食しながら祈ります。重要な決断をする時、大切な選択をする時に、まず断食までしながら祈って決断したネヘミヤの信仰を私たちも見習う必要があるでしょう！

しかし、ネヘミヤが断食の祈りまで捧げながら、重要なことを決断しようとしたのは、ただ危機や緊急な時だけではなく、常に祈りの生活を大切に、まず祈ることを最優先にする信仰をしっかりと保っていたのではないのでしょうか。祈ってから、ネヘミヤは王の前に出て本国(ほんごく)に戻るようにと許可を求めました。そういうわけで、ネヘミヤは王からの承諾を得て、ユダの総督(そうとく)という資格で本国に帰還し、12年間、総督として働きました。ユダのエルサレムに戻って来たネヘミヤは返って来た四日後、破壊されたエルサレムの城を回って見て、さっそく城壁を立て直す作業に取り組みます。エルサレム聖殿はすでに再建されていましたが、エルサレムの城壁はまだ立て直らないままで、生活基盤の不安が続いていました。

このエルサレムの城壁は聖殿とともにイスラエルのユダヤ人たちの精神的な基盤でした。しかし、ネヘミヤ記4章と6章には、エルサレムの城壁を再建することに北のサマリア人たちからの妨げがたくさんありました。それにもかかわらず、神様の奇跡的な知恵と御助けによって、何と52日間でネヘミヤの指導のもとで、エルサレムの城壁建築が完成されるようになりました！これで、外側の環境は整備(せいび)されました。多くの妨げもありましたが、城壁も再建され、エルサレムの都市も新しくなり、ユダ王国のイスラエル民たちの生活も落ち着いて来ました。それでネヘミヤの使命がもう終わったかとする、そうではありませんでした！

もしかすると、エルサレム城壁を再建するよりもっと大切な使命が残されていました。何でしょう。それは霊的リバイバル(つまり、内側にイスラエルの民を信仰的に新しく立て直すこと)でした。これからはエルサレム城の中に住んでいるすべての民がもう一度神様の御言葉に立ち返って、一人ひとりが変えられ、改革され、あらたに霊的にリバイバルされる課題が残っていたのです。

しかし、それはネヘミヤだけの力では出来なかったので、祭司であり、聖書学者、書記官だったエズラとも協力が必要でした。そして、エズラ学者にその役割を任せたのです！

今日の本文は、聖書学者エズラを通して、みんなに神様の御言葉を聞かせ、悔い改めることに導き、神様からの大きなリバイバルと改革が起こされるすばらしい場面でした。

<3. 今日の本文の大切な教訓2つ>

今日のネヘミヤ記本文が我々に与えて下さっているいくつかの大切な教訓があります。

一つ目は、イスラエルの民に神様の御言葉の前にとどまることが真の回復のはじまり！(1、3節)

8章1節によると「民全体が、一斉(いっせい)に水の門の前の広場に集まって来た。そして彼らは、主がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持って来るように、学者エズラに言った。」

イスラエルの民が水の門の前に集まりました。お年よりも、子供も、青年も、男も、女も、そして話が聞ける人々はみな集まりました！そして、学者エズラに神様の律法の書を持って来るようにとお願いしました。注目すべきところは、民たちの方から御言葉を聞かせてくれとお願いしています。学者エズラからではなく、民の方から神様の御言葉に対する飢え渴きを持ってお願いした事です！(城壁を完成したばかりで、疲れてゆっくりしたかったのではないのでしょうか。今まで忙しすぎたので、家族とのゆっくり時間を持ちたかったのではないのでしょうか。働きが忙しすぎで今まで出来なかったこと、やれなかった個人的なことをいくらでも優先にすることが出来たのではないのでしょうか。

しかし、彼らは神の御言葉の前に家族みんなで共にとどまることが最優先にしたのです！なぜでしょうか。70年前の辛い試練と苦難を通して、ようやく完成させたあの城壁は自分たちを完全に守ってくれるのでないことを！目に見えるあの城壁はまたいつかだれかによって崩れるかも知れない、あの目に見える物が我らを完全に守り、新しく回復させる保証ではなく、神の御言葉を聞き、従うことこそ、真の回復と癒し、改めて新しく人生を立て直すことが出来る神の力と知恵であることを失敗を通して知っていたからではないのでしょうか。)

それとも水の門の前の広場で、夜明けから真昼まで(約6時間以上)民はみな、律法の書、神の御言葉に耳を傾けた(3

節)と書かれています。「8:3水の門の前の広場で夜明けから真昼まで、男、女、および理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな律法の書に耳を傾けた。」

今までの他国での奴隷の70年の間、イスラエルを離れ、他国で住んでいて、御言葉もまともに聞けなかったでしょう。イスラエルのユダの民は自分たちに、いのちのような神の御言葉を聞かせてくださいとお願いしたのです。愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！みなさんは今どんな心構えで神の御言葉を聞いていらっしゃるでしょうか。

我々は人生の歩みの中で様々な失敗や苦難と苦悩を経験しますが、その時に、最優先に我々が取るべき姿勢と飢え渴きは、目に見える環境や状況の改善と期待より、すべての問題の解決者なる神様の御言葉に真の解決と回復の道があることを信じ、自身の思い込みから、しっかり神の御言葉に立ち返り、神の御言葉の前に留まり、神の御言葉に聞くことではないでしょうか。日々、みなさんに神の御言葉が聞こえていますか。神の御言葉に留まる時を持っていらっしゃるでしょうか。“我々に毎日、我が救い、我が力、我がやぐらなる神様の御言葉を聞かせてください！”と

今日の本文で、イスラエルの民はそういうわけで子供から始め、年配の方々までみな集まって御言葉を聞かせてくれるように求め、お願いしたのです。何時間も御言葉に傾けていました！それで、もう一度生まれ変わるように、新しく、力強く立て直すことが出来る神様からのリバイバルを経験することができたのです！

今まで、どこの国であっても人類の歴史の中、神のリバイバルが生じ、多くの人々が救われ、神の教会が力強く成長し、町が変わり、国が変わった共通のところでは、みんな神の御言葉への飢え渴きと求め、留まっているうちでありました。

例え、今日、クリスチャン人口3-40%だと言われ、今や世界に一番多くの宣教師を遣わしている韓国にも、1907年大きなリバイバルがきっかけとなりました。そのリバイバルが起こったきっかけは何か特別な出来事からでは決してありません！聖霊の神の神秘的な奇跡でもありません！ただ、ひたすら、神の御言葉に対する飢え渴き、神の御言葉への強い、熱い信仰にありました！

初代の韓国のクリスチャンの方々は一週間から2週間連続で「聖書集会（聖書中心に学び、礼拝する）」が開かれると、全国から、神の御言葉を聞こうとして、学ぼうとした大変熱心で情熱がありました。その頃の韓国の人たちは貧しくて、文字をやっと覚えた程度にしか学んでいなかった時代なので、少なかった牧師先生が黒板に書いてくれる聖書の内容を木炭(もくたん)のような小さな木の物で必死について書いたり、恥を忍んで聖書を必死に書き写したり、聞いた神の御言葉を暗唱しようとして必死だったのです。韓国の初代のクリスチャンたちだけではなく、日本の初代教会のクリスチャンたちも、宣教師たちを通して教えられた神の御言葉にどれほど熱心だったのか分かりません。

神様が神のすべての良い働きのため我々をさらに用いて下さるために、もっとも基本で、大切な信仰の姿勢があります。それは、神の御言葉に常にとどまり、神の御言葉を自分に聞かせ、御心に従おうとする熱望ではありませんか。

テモテへの手紙第二3章15~17節「聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。16聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。17神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。」

神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためには、いつも神の御言葉に立ち返ってたえず神の御言葉の前に謙遜に留まらなければなりません！それが真の回復の、さらに新たに整えられ、用いられるためのはじまりです！

最近、我々はいかがでしょうか？神の御言葉にどう向き合っているのでしょうか。大変お仕事の忙しさや疲れの中でも、神の御言葉に留まり、神の御言葉を自身に、家族に、子どもたちにちゃんと聞かせているのでしょうか。

聖書が日曜日だけ開く書物にすぎないように扱ってはいませんか。それほど、惜しいことはないでしょう。

10年、20年それ以上長らく教会に通っていても、聖書をまともに読まず、知らず、信仰生活を続けているの方々クリスチャンプレイズ教会の中にはいないように切に祈ります。30-40分の聖書のメッセージの時間の時だけでも耐え難く、背一杯にならないように、もう一度真剣に神の御言葉に傾けようではありませんか。

当然人生には様々な問題があります。人はすぐ揺らぎやすく、倒れやすい者です。人はすぐどちらかに思い込みやすく、かたよりやすいものではありませんか。そんなさまざまな問題にぶつかるたびに自身の思い込みに頼らず、謙遜に神様の御言葉に留まり、神様の御言葉による神の知恵と導きを求める私とみなさんとなりますようにお祈りいたします！
新たな神の知恵と相応しい力を持って乗り越えて行けるために、今、我らにも神様の御言葉に対する新たな飢え渴きと

熱心をもう一度取り戻すべきではないでしょうか。

二つ目、神様の御言葉に応答(悔い改め、従順)する信仰の姿勢(8:5-6節)。

「5エズラは民全体の目の前で、その書を開いた。彼は民全体よりも高いところにいたのである。彼がそれを聞くと、民はみな立ち上がった。6エズラが大いなる神、主をほめたたえ、民はみな両手を上げながら「アーメン、アーメン」と答え、ひざまずき、顔を地にふせて主を礼拝した。」

イスラエルの民には神様の御言葉に対して聞くだけではなく、応答します。神様の御言葉が語られた時、御言葉に傾け、民はみな立ち上がり、主をほめたたえました！御言葉に傾け、謙遜に神様の御言葉を受け入れたイスラエルの民は、神様の御前で悔い改め、自分たちの偽善と罪の衣を脱いで、改めて御言葉に対する信頼と従順の姿勢が伴われました。

御言葉に対し、早速の悔い改めと実践が伴います(9節)。9章1節(「その月の二十四日に、イスラエルの子らは集まって断食をし、粗布(あらぬの)をまとって土をまぶった。」)悔い改めと告白のムーブメントが起こります。

神様の御言葉を聞くと、神が自身に語って下さるように、受け止め、生きておられる神の御前で自分を省みるようになります。神の御言葉を聞いたイスラエルの民の悔い改めの祈りが9章3節~38節までずっと続いています。

9:2-3節「イスラエルの子孫はすべての異国の人々と関係を絶(た)ち、立ち上がって、自分たちの罪と先祖たちの咎を告白した。3彼らはそれぞれ所定(しよてい)のところ立って、昼の四分の一は、彼らの神、主のみおしえの書を朗読し、次の四分の一は、彼らの神、主に告白して礼拝した。」

9:16-17節「しかし彼ら、私たちの先祖は、傲慢(ごうまん)にふるまい、うなじを固(かた)くし、あなたの命令に聞き従いませんでした。17彼らは聞き従うことを拒み、彼らの間で行なわれた奇(く)しいみわざを思い出さず、かえってうなじを固(かた)くし、かしらを立てて、逆らって奴隷の身に戻ろうとしました。それにもかかわらず、あなたは赦しの神であり、情け深く、あわれみ深く、怒るのに遅く、恵み豊かであられ、彼らをお捨てになりませんでした。」

9:28-29節「しかし、一息(ひといき)つくつと、彼らはまた、あなたの前に悪事(あくじ)を行ないました。あなたは彼らを敵の手に捨て置き、敵が彼らを支配しました。彼らが再びあなたに叫び求めると、あなたは天からこれを聞き入れ、あわれみによって、たびたび彼らを救い出されました。29あなたは彼らを戒(いまし)めて、あなたの律法に立ち返らせようとされました。しかし、彼らは傲慢(ごうまん)にふるまい、あなたの命令に聞き従わず、その命令を行う人は、それによって生きるというあなたのために背いて罪を犯し、肩を怒らして、うなじを固(かた)くし、聞き入れようとはしませんでした。」

9:31節「しかし、あなたはその大いなるあわれみにより、彼らを滅ぼし尽くすことはせず、お見捨てにもなりませんでした。あなたは、情け深くあわれみ深い神です」

これがネヘミヤ記に記録された霊的リバイバルのムーブメントのはじまりでした！

本当の人生の変化と回復、新しい始まりは、人生の方向転換となる、神の前での悔い改めから始まります。この悔い改める力と示しは、神の御言葉に正直に自信を直面させ、正直に応答し、告白する時じゃなければ、起されないことを忘れてはいけません。

昔ローマにアウグスティヌスという人がいました。長い間の母親の祈りにもかかわらず、さまよって異教に外れ、性的にも墮落し、傷だらけの人生を送っていたアウグスティヌスでしたが、良い機会が訪れました。知識的に、学問的に天才だった彼はローマの宮殿で教授として過ごす出世の道が開かれました！しかし、神様は彼に全く違う計画をもっておられました。ある日イチジクの木の下を歩いている時、急にアウグスティヌスに神の御声が聞こえます。

「取って読みなさい！」と。彼は、その時から聖書を探して真剣に読み進めました。聖書を読んでいる中、ローマ人への手紙13章14節に「主イエス・キリストを着なさい。欲望(肉の欲)を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。」という御言葉に強く打たれました。今まで、自分が隠して来た自分のさまざまな情欲と執着の罪に縛られて来ていた自分を、すでに神は自分の事をすべて見ておられ、知っておられるのにも関わらず、耐え忍んで下さった神の憐れみと愛に気づき、心深く悔い改めました！これが彼の人生が新しく生まれ変わったのはじまりでした！386年8月のことでした。アウグスティヌスは、その日以来、毎日聖書の御言葉を手放せず、親しみ読み続けているうちに、その翌年387年4月に、涙を流しながら、洗礼を受けました。

真のクリスチャンになってから、彼は聖書、教理、神学の研究の活動などを情熱的にしながら、多くの当時異端やカルトの攻撃や妨げから、神の御言葉が真理であり、主の教会の純潔を守りながら、さらに広げ、まるで使徒パウロのような大事な役割を果たした者として用いられました。彼のそのような原動力はどこからだったのか、彼が召されてからみんなが分りました。

430年8月、召される前にしたアウグスティヌスは、ダビデによる悔い改めの詩篇の御言葉を壁に張って毎日読みながら、時には泣き叫びながら、よく祈られたそうです。そして、神の御胸に抱かれ、御国で安息されるまで、アウグスティヌスはたえず、神の御言葉に、自身を隠すところなく直面させ、悔い改めた生き方と人生でした！

イエスキリストを信じるクリスチャンの人生は、日々神の御言葉に正直に応答し、悔い改めを通して生まれ変わり続け、御言葉通り守り行うことにより成長し続け、天の御国の民として生涯を生きぬく者ではないでしょうか。

愛する信仰の家族みなさん！我々に必要とされることがあれば、それは神様の御言葉に対する飢え乾きと絶対信頼の心と神の御言葉を愛する姿勢ではありませんか。

今日本文であるネヘミヤ記によると、イスラエルのユダの民が捕虜とされた地から帰って来て、ある面、外的なことは全部そろいました。聖殿も完成させ、城壁も再建しました。もう生活も落ち着いて来ました。そして、都市も整備され、あらゆる妨害する勢力も追い払うことが出来ました。もうこれで十分だ、これで安全だと思いましたが、彼らにはまだ必要なことがありました。それは神様の御言葉によって内面的に、靈的に新たに変わる改革と回復でした！

本日我々も同じではありませんか。我々にはちゃんと住むところもあり、職場もあり、子供たちも元気に育ち、必要な物は与えられ、満たされ、特に何の問題がないと思われるかも知れませんが、その時、我々の内側を見つめなおさなければなりません。

みなさんの最近だれも知らない自分だけの空間はどんな状態でしょうか。最近自分はどんな靈的状态でしょうか。神の御言葉を通して、我々のうち側をいつも探り、神の御前で、心の奥底の所で罪を犯している自分はないのか、靈的乾いている状態ではないのか、靈的渴いている状態ではないのか、御言葉の鏡に照らしてみるのはどうでしょうか。

神様の御言葉こそ、我らを新しく変えさせ、人生の方向を転換できるように、さらに新しく見直すことが出来るように導いて下さいます。自分を一番良く知っているのは自分自身です。しかし、神様は我ら自分が自分を知っているよりもっとよくご存知です。

我々を造られた創造主なる神様は我々がどう生きていけば幸せになるか、どうすれば、人生の靈的飢え渴きを満たすことができるのか、神様の御言葉である聖書は今日も我々に教え、導き、約束を与えて下さっています。

今日も神様の御言葉に飢え渴いた心で、自分に与えられる神様の御言葉に常にさっそく反応し、悔い改め、従い、守り行うことにより、日々、我々の霊と内面が神様の恵みと平安、力と知恵をいただいて、新しくされ、満たされ、立ち上がって生けると信じます。

最後に、詩篇1篇の御言葉を祝福します。

「詩篇1篇1幸いなことよ。悪しき者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かない人。

2主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。3その人は、流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結び、その葉は枯れず、そのなすことはすべて栄える。」アーメン！

始まった今週一週間、始まったこの2月から主とともに、主の御言葉と共に日々歩めます

愛するクリスチャンプレイズチャーチの神の家族となりますように、主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！

